

2020年度文系チャレンジ講座（第4回）を実施しました

8月26日（水）に教育学部の鄭敬娥先生を講師に迎え、「民主主義は完璧な政治システムなのか？」というテーマで、文系チャレンジ講座の第4回を実施しました。遠隔配信した臼杵、国東、竹田、大分西、大分商業、中津南、大分雄城台、大分鶴崎と来学した玖珠美山、大分東明の10校196名が受講しました。

鄭先生はまず、集団や社会には成員全体を拘束する統一的な意思決定を作り出す機能があり、その社会に対する有形無形の価値を権威的に分配する作業が政治と呼ばれると説明されました。

例えば、コロナ禍という国難に対峙し、「緊急事態宣言」のように移動を厳しく制限する政策と「GoTo」のように経済の活性化を促す政策が打ち出されました。一見、相反するような政策ですが、社会の維持のためにはどちらも必要です。では、どちらにより多くの時間を、人材を、予算を使うのか。社会の構成員が求めるものの価値の順番を決めるが政治です。

では、その政治を一体誰が行うかを考えたとき、専制・君主制・独裁とよばれ国王や貴族といった少数の特権階級によって行われたこともありました。一方、社会の構成員全員で代表者を選び、その代表者により行われるのが、今日採用されている民主主義という形態です。

民主主義の歴史は古く、古代ローマの都市国家では「市民」による民主的な政治が行われていました。しかし、この「市民」は、その社会の成り立ちや歴史、仕組みを理解し、主体的な判断力と責任能力を

有している者を指しており、民主主義は、その政治に参加する「市民」が、適切な判断力のもと自由な意思決定をし、そこに責任を負える能力を有していることを前提としていると話されました。

それゆえ、古代ローマの都市国家以降、民主主義という形態は長い間どの国家でも採用されず、少数の特権階級による政治が中世の主流となり、民主主義が広まったのは18世紀の市民革命以降になります。その後、普通選挙制の確立によって、「市民」ではなく「大衆」による政治社会が登場し、民主主義の最大の弱点となりました。

このように、現在の民主主義は完成形ではなく、現在進行形のシステムであり、その民主主義を正しく機能させ、社会を構築していくには、すべての構成員による努力が必要で、十分な議論、自由意志による判断、また決定の行く末を監視する責任をもち「大衆」ではなく「市民」としての政治に参加することが皆に求められているとおっしゃいました。

講義後のアンケート調査では、「総合的に判断して授業がよかった」（98%「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」の合計。以下同じ）、「教員は真剣に取り組んでいた」（99%）、「受講生は授業に意欲的に取り組んでいた」（97%）という結果でした。遠隔配信については、「音声はよく聞こえた」（91%）、「映像はよく見えた」（94%）という結果が出ました。

